

ハンドボール選手に生じた上腕二頭筋短頭断裂の1例

公益財団法人 スポーツ医・科学研究所

鬼頭 満 横江清司 亀山 泰

【目的】

ハンドボール・キーパーの選手に生じた非常にまれな上腕二頭筋短頭断裂の症例を経験したので報告する。

【症例】

症例は、25歳男性、ハンドボール実業団キーパーの選手である。2012年春、左上コーナーへのシュートに対してセービングし左上腕痛が出現した。初診時所見は、上腕遠位内側に圧痛と陥凹を認めた。超音波・MRI検査では上腕二頭筋短頭の完全断裂を認めた。よって、上腕二頭筋短頭の遠位筋腹断裂と診断した。保存治療による筋力低下・陥凹残存を説明したが、本人は手術を希望をせず保存治療を選択した。筋力低下の程度は、1986年Sturzeneggerよると長頭腱断裂の保存治療の場合は健側の84%になることから、短頭断裂と違いはあるが本例も約80%は回復すると予測した。治療経過は、受傷から2週間ギプスシーネ固定し自動運動を開始した。4週からキャッチボールを徐々に開始し、6週からアームカールを5キロにアップし、以後段階的にキーパー練習も開始した。受傷8週の肘屈曲筋力はMMT5であり、Hand Held Dynamometerによる筋力測定結果は右213Nに対し左166Nで健側の77.9%であった。この時点で、疼痛・不安感・可動域は改善しており、筋力は健側比で約80%に回復したので試合でのキーパーも許可した。現在、愁訴なくキーパーへ完全復帰している。

【考察】

スポーツによる上腕二頭筋短頭断裂の報告は、われわれの調べた限りでは、1992年Christinaの水上スキーによる1例、2005年笠井らのテニスによる部分断裂の1例、2010年水野らの体操による1例で、ハンドボールにより生じた症例は自験例を含めて4例のみであった。発症機序は明らかではないが、セービングした際には、肘関節伸展位で肩関節は120度程度の外転位となる。その際、解剖学的に外側にある長頭は弛緩し、内側にある短頭は強い伸張ストレスを受ける。その状態で、ボールが手に当たり水平伸展が更に強制されることにより短頭に非常に強い遠心性収縮力が加わり、短頭単独断裂の受傷に至ったと考える。